

## 野長

## ひとりごと

85

齊藤

譲



暮れから正月にかけて  
読んだ本の中に、網沢昌  
永氏の「子育てに学歴は  
いらぬ」という一冊が  
ある。氏はこの本の中で、  
子どものしつけについて  
語っているのであるが、  
しつけは母親が自ら実践  
して教えることであり、  
その責任は九五パーセン  
ト母親にあると言いつつ  
ている。他人の文章を使  
わせていただくことは、  
たいへん恐縮であるが、  
とても余韻の残るもので  
あったので、冒頭の「お  
母さんという存在」の部  
分を、多少長くなるがこ  
こに紹介させていただき  
たい。

▼私は三十一年間教職に  
ついておりました。その  
間多くのお子さんをお預  
かりし、送り出してまい  
りました。  
その子ども達の追跡調  
査をしてみますと、立派な  
社会人になって活躍してい  
る子どもというのは、みな  
しつかりした家庭に育つて  
いることがわかります。こ  
とにお母さんが素晴らしい  
家庭です。これは恐ろしい  
ほど例外がありません。お  
母さんがどういう人柄であ  
るかがわかると、その子の  
将来がどういうものになる  
かは、ほぼ予測がつくほど  
です。ある意味では恐ろし  
いことです。では、どうい  
う家庭がしつかりしていて、  
どういってお母さんが素晴ら  
しいお母さんなのか。ここ  
に、ある農家の小学二年生  
の女の子が書いた作文があ  
ります。これを読めば、子  
どもにとつてお母さんとは  
どういう存在なのか、私が  
百万言を費やすよりも明快  
にわかります。

▼今日もお母さんははたけ  
だろうと思いが、学

校からかえってくると、  
やっぱり大戸がしまつて  
いました。入り口の戸が  
しまつているということ  
は、お母さんがいるすとい  
うしんご  
うです。  
私はつま  
らないな  
あとと思  
つて、大戸  
を「よい  
しよ」と  
あけまし  
た。する  
と私はび  
っくりし  
ました。  
庭中いっ  
ぱいになにか書いてあ  
ります。よくみると、そ  
れはけしきみて書いたお  
母さんの顔です。大きな  
顔のそばに「おかえり、  
焼山のはたけのところ  
にいるよ」と書いてありま

## 「お母さん」という存在



した。私はけしきみて書  
いたお母さんが待つてい  
てくれたので、さびしく  
ないと思えました。カバ  
ンをおろしてから、けし  
きみてを一つもつてきまし  
た。そしてお母さんの顔  
のところに小さい私を書  
きました。リボンをつけ  
た私にしました。そして  
「お母さん、かたたい  
てあげるよ」と書きまし

ふみをしてあそびました。  
▼「百千の灯あらんも我を  
待つ灯は一つ」という言葉  
が思い浮びます。子どもた  
ちの心を誘い込もうと、色  
とりどりの灯が光を競い合  
っています。しかし、この  
子のような母さんが家庭に  
いてくださり、心の灯をか  
けてくださるなら、灯を  
間違える子どもは一人もい  
ないでしょう。それほど子  
どもにとつて、お母さんと  
いう存在は絶対のものなの  
です。

まず上に漉んだ麦をかき  
寄せ、少しでも麦の少な  
いところを、私や妹の弁  
当箱に盛ってくれていた。  
子ども心にも、母親の心  
配りを感じたものである。  
ところで、私には母につ  
いて忘れられない思い出  
がある。それは、私が成人  
式を迎えるにあたって、  
親戚の洋服屋に背広を注  
文しておいたのであるが、  
都合で間に合わなくなっ  
てしまった。しかし、自  
転車も乗れない母は、当  
日の朝父が止めるのも聞  
かず、歩いて横芝の洋服  
屋まで出かけていった。  
出来ないことを承知のう  
えのことである。肩を落  
して帰ってきたあの時の  
母の姿は、今でも脳裏か  
ら消えない。父親には、  
こんなことはどうしてい  
きる芸当ではない。  
曾って、戦場で散華し  
た若者が最後に発する一  
言は、決して「お母さん」  
であったという。母もま  
たこう語り返さず。  
靖国の宮に御霊は  
鎮まるも  
折々帰れ 母の夢路に